

2018年度 須磨学園中学校 入学試験問題 第3回

国語 出題意図

全体について

2018年度の問題作成にあたり、須磨学園のスローガンである「to be myself,...」に基づき、従来の方針や様式を継承しつつ、受験者の学力を検出できるよう配慮した。また、「知識を中心とした漏れのない基礎力」に基づき、「内容・表現・心情について深く思考し表現できる応用力」をどれだけバランス良く兼備しているのかを判定できる試験問題を目指した。

以下は、問題作成担当として、留意した点である。

- (1) 問題は、昨年度から「小問集合」を1題削って2題構成とし、「説明文」「小説文」の配列、150点の配点、60分の問題とした。
- (2) 出題範囲と問題構成は、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な力が反映されるよう配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように構成し、各設問の難易度のバランスを考え、識別力のある問題となるよう留意した。
- (3) 問題文や設問及び選択肢の吟味には、上記の学力を問うものなるよう細心の注意を払うとともに、リード文や注は受験者の理解の一助となるよう工夫した。

各問題について

□ 館野鴻「命は描けるか」からの出題。虫を毛嫌いし、自然環境から疎外された人間のありようを踏まえ、人間を含めた自然環境のありようを見直すことを説いた文章。生物画家であり絵本作家でもある筆者ならではの視点から、自然と人間の接点を、「絵本」という作品を通して探すという試みについても言及されている。人間と自然との関わりを考える上で、良い素材となると考え、出題した。

問題は、漢字の書き取りを含め、基礎知識について問うたもの（問四、十）、傍線部の内容理解（問六、七、八）、傍線部の理由把握（問二、三）、論理的思考を試す問題（問一、五）も出題した。

問一では、第1回と第2回とは異なり、前後の文脈から接続表現を自分で記述させることにより、思考力や表現力をも間接的に確かめている。問五は、指定語を必ず用いて空欄を補充させる問題であり、空欄前の話の流れを適切に理解した上で、語と語との関係から適切に内容を表現する力を問うた。

問九の記述問題では「筆者の考えや取り組みについて」と設問に付帯条件を加えることによって、結論部の「筆者の考え」を踏まえつつ、冒頭の筆者の「取り組み」に触れられるよう配慮した。受験者の視野の広さが要求される難易度の高い記述問題となった。

□ しまおまほ「ジッターとマンマー」からの出題。筆者は「死の棘」等で知られる、島尾敏雄の孫にあたる。物語は、孫である筆者の視点から、当時の自分には容易には理解できない風変わりな祖父母の姿が描かれている。気分屋で、機嫌が良いと思ったら突如怒り出す祖母のマンマー、一見穏やかだが、おままごとでは孫の前で、普段からは考えられないような粗暴な役に徹し出す祖父のジッター。自分には想像もつかない存在を仮に他者と呼ぶなら、祖母も祖父も、他者と呼ぶにふさわしいだろう。自分と他者との関わりについて考える素材として適当だと考え、出題した。

問題は、基礎的な語彙に関する知識について問うたもの（問一、問二）に加え、主人公の心情を問う問題（問三、七）を導入として、主人公以外の登場人物の人物像や心情を問うた問題（問四、六）、行間を読み取る問題（問五）を出題した。いずれも本文に描かれた断片的な情報から、人物像や心情を把握することを目的としている。出題文の性格上、他者に焦点をあてた、スタンダードな作問を心掛けた。

例年の傾向ではあるが、特徴的なのは、問六において「ジッター」の発言の意図について問うたが、この問題では「ジッター」の発言を額面通り理解するのではなく、ただ単に孫の要望通りの「だんなさまの役」になりきっていることを示すものであることを前後関係から関連づける力を問うている。